会員のひろば

壇

葡萄

谷川　操一

葡萄食ぶ鳥にやられし残りもの
踊り手の大波とぎれ風の盆
叱られし記憶のひとつ青林檎
あやふさの色残しおり夕牡丹
つんつんと妻が先行く梅雨曇り

空と宙と

竹内　章二

縄文の土偶も見たか雲の峰
かささぎの橋かける夜の宙深し
港晴れ空舞ふ鴎や白き秋
銀漢を仰ぎ故郷はるかなり
地蔵盆万灯供養月明下

秋麗

髙島　治

黄絨毯安房の里には早稲の波
山頭火の伊豆の夕焼け共感す
鈴虫の音を聴き比べ更けし夜
重陽や燗は人肌二合半
野に在りて白は純なり男郎花

俳歴研よこはま

風の盆

藤盛　詔子

坂道をのぼる胡弓や風の盆
表札の文字の薄れや西日射す
老ひてなほときめきのあり水中花
食べごろになるまで供へ水蜜桃
もう秋と返事返らぬ人に告げ

滑稽俳句

竹村　清繁

ソプラノは奇絶寸前鳥交る
香水やゆつくり戻つて来るお辞儀
手を挙げて水鉄砲の捕虜となる
象舎より鼻の出てゐる寒さかな
大根を閲兵しつつ猫歩く

ふるさとの秋冬

内山　昇

谷川岳の風に凍てつく湯檜曽宿
屹立の谷川連峰冬ざるる
奥利根の流れへ釣瓶落しかな
綿虫にけふも会へさう天守跡
人気なき底冷ホーム沼田駅

歌壇

こはま

高野賢彦

台風が東側からくるという
慌てふためく日本列島

朝顔の花数えてもすぐしぼむ
長持ちする種を造ってたもれ

雨上がり黒雲と青空のせめぎ合い
心もとない旅の空

絶海の沖ノ島にて舞う神楽
千古の昔いまに伝わる

縄文の人々祈る星空を見上げて
われは何を祈らむ

朝ドラの「半分青い」の映像の
鳥高く飛ぶ場面はたのし

青空や野分は未だかいつ来るか
切に望むは誰がためならむ

竹村紘一

人は皆　逃れぬ道と　知りえども
その日が来るとは　思わざりしを

春風に　吹き誘われて　垂乳根の
散り逝くさまを　永遠に忘れじ

散る桜　残る桜も　やがて散る
人の定めも　かくの如きか

梅が散り　桜も散りて　はなみずき
有馬の里は　長閑なりけり

願わくは　月の下にて宴開き
親しき友と　歴史語らん

はぜ天と　歴史談義で　酒酌めば
長閑なるかな　混濁の世も

朝敵と　なりし家でも　婚家なり
守る我が身に　迷いはあらじ

（天璋院と静寛院宮を偲んで詠める）

よ研歴

市川康夫

青空に燕飛び交ひ言の葉は
風のまにまにわが歌ごころ

朝焼けは色あざやかに移りゆき
日輪待つ間絵描きとなりぬ

大空をひんがしへとぞ防人の
思ひこめたる雁のことづて

古歌伝へなどか止めにし家持の
撥ひ難かりしこころ悲しも

老いてこそトロイメライの妖しけれ
シューマン若く揺り籠の夢

薄墨に描きしごとき伊豆の峰
遠くにあれど親しく近し

夢うつつ潮騒きけばなみ猛る
夜の浜辺に遊ぶやうなり

詩壇　よこはま　研歴

「鳩の便り」

丹下重明

哀しみをひめた
透明なかろやかさに
こころひかれるのです

歌曲集「白鳥の歌」
最終曲

詩はザイドル
ホルツマイヤーのバリトンが
珠玉のピアノにのって
やわらかく広がります

秋の陽ざしのなか
遠く高く鳩は飛ぶ
愛の便りを運ぶ
鳩の名は「あこがれ」

死を前にしてのシューベルト
病の苦しさに濁ることなく
明るく優しく暖かい曲

「あこがれ」

それは生きることへの
あこがれだったのでしょうか
このリートがかれの白鳥の歌
となりました

訃報

相談役　石関　貞治様

平成三十年九月十九日ご逝去
享年八十三歳

石関さんは平成元年に当会にご入会され、理事・常任理事・顧問・相談役を務めていただき、会の発展に多大なご尽力を賜りました。

ここに謹んで哀悼の意を表しご冥福をお祈りいたします。

合掌

なお、相談役　菅原啓一郎様による追悼の辞を本号８１頁に登載させていただきました。